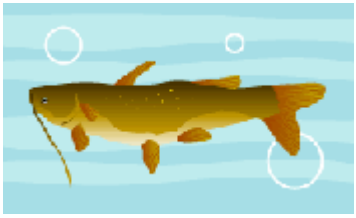
大池ナマズの指南書（その３）



建物には雨樋（あまどい）がついていますが、縦樋は必ず２箇所以上設けること、これは設計の初歩的な常識です。片方が詰まった場合、もう一方があるので横樋からのオーバーフローが防げます。

航空機も、万が一のケースが考慮されていて、仮にエンジンの１つが停止しても飛行は可能ですし、重要な電子機器では、ある経路が壊れても別ルートがそれを補うようになっています。

三重県の伊勢神宮は１つの棟が２つの敷地を持っています。20 年に一度、左右の敷地で移動を繰り返し、もう 1300 年も続いた「式年遷宮」という慣習です。最近よく、サステナブル（sustainable／持続可能な）という言葉が、環境のキーワードとして登場しますが、この伊勢神宮システムは、諸外国に大きな驚愕を与え、サステナブルの究極の理想モデルと言われています。

さて、ライフラインの話です。私たちは平常時、鉄道や道路、医療や消防など、これらに全幅の信頼をおいて暮らしていますが、危機管理の専門家たちはこれらの大動脈に警告を発しています。都市のライフラインはその多くが単線、つまりサステナブルでなく、非常時やメンテナンスを考えれば、それを複線化したほうが良いことに気がついたのは、実は最近のことです。例えば、都市ガスとプロパンを併用したり、太陽光発電やバッテリーを充電しておくことが有効であることは、素人でも容易に想像できる内容です。横浜市でも今年度から、消防部門に危機管理のセクションを設置し、消防隊員が自衛隊の役割を代行できるように取り組み始めました。

非常時を考えて手段を複線化する。例えば消火器を２個にしたり、備蓄庫の鍵を大勢で持っていたり、町内の小さな器具なら、班長の物置に分散して配置したり‥‥。

生活の複線化には、お金もかかりその管理も面倒です。又、平常時の感覚では無駄に思えてしまうあたりが落とし穴です。危機管理の専門家がどんなに警告を発しても、行政が動かなかったあたりも理解できなくはありません。しかしこれは、成熟社会になったから考えられることで、又考えなければならないことなのです。